

2026年3月13日（金）

老球の細道911号

新しいシーズンのスタートに向けて選手へのスピーチ「現在を大切に生きてよ」

会津バスケットボール協会 室井 富仁

もうすぐ新年度を迎える。自宅療養している私の耳にも教員の移動、選手の進学先などの情報が入って来る。その情報をもとに、来年度はA高校がよくなるかな、B高校もまた変わるかなどと岡目八目でチーム力を予測するのもまた楽しい。

4月に新入生、新チームを結成した時に、最初のミーティングでコーチはどのような話をするのだろう。私は是非「今日を大切に生きてよ」という話をしてほしいと思う。米カレッジバスケットで唯一2チーム（ケンタッキー大学、ルイビル大学）をNCAAチャンピオンチームに導いたリック・ピテイーノ（現在ギリシャナショナルチームH・C）は『チーズはどこへ消えた』〈扶桑社〉で有名なスペンサー・ジョンソンの『人生の贈りもの』に書かれてある少年と老人の話の聞かせるという。この通信でもだいぶ前に書いているが、簡単に紹介したい。

【ある日、老人から「君は素晴らしい贈り物を持っている。それに気づけば幸せになれる」と言われる。少年は「それは何ですか？」と尋ねても「自分を幸せにできるのは自分しかないから、結局、自分で気づくしかない」という答えしか返ってこない。数年後、若者は答えを見つけるために旅に出かけるが、すばらしい贈り物はみつからない。数十年後、老人になったときにやっと気づいた。答えは「現在」だった。過去でも未来でもなく現在が貴重な贈り物だから、今この瞬間を大切に生きて行けば自分を幸せにできる】

1988年代に活躍したルイジアナ州立大ヘッドコーチ・デイル・ブラウンも『一日ずつ』という同じような教訓を選手達に話している。

【毎週、われわれには怖れとか心配事で悩まされる日が二日ある。

その一日が「昨日」である。間違いや心配の種、失敗や大失敗、鋭い痛みや鈍い痛みのある昨日だ。昨日は永遠にわれわれがどうすることもできないところへ行ってしまうと、どんなにお金をつぎ込んでも昨日を取り戻すことはできない。

われわれはやったこと一つでも元通りにできないし、「昨日は昨日さ」みたいなことは一つたりとも消し去るできない。

われわれが悩んでも仕方がないもう一方の日とは、大失敗をやる可能性があり、大きな約束事やミスをするかもしれないという「明日」である。明日もまたすぐに行動をうつせないわけだ。明日の太陽は、輝いてか、大きな雲に隠れてか、のどちらかで姿をあらわすのだが、いずれにしても、日は昇る。太陽が昇るまで明日という気持ちになれないのだ。

こうなると残る唯一の日とは「今日」なのだ。どんな人でもたった一日の闘いに挑むことが可能なのだ。「昨日」と「明日」という、二つの永遠の重荷を背負ってしまったときのみ、われわれは押し潰されてしまうのである。

コーチは、人生において大切なことを歴史上のエピソードや寓話などで話してほしい。